

言語発達分科会 平成30年度活動報告

意図共有について探る

日本発達心理学会言語発達分科会シンポジウム

(共催：新学術領域「共創的コミュニケーションのための進化言語学」認知発達班)

企 画：	小林春美	(東京電機大学)
	高橋 登	(大阪教育大学)
	田中みどり	(女子栄養大学)
司 会：	小林春美	(東京電機大学)
話題提供者：	皆川泰代	(慶應義塾大学心理学専攻)
	明地洋典	(東京大学 こころの多様性と適応の統合的研究機構)
	山本淳一	(慶應義塾大学心理学専攻)
指定討論者：	大井学	(金沢大学 子どものこころの発達研究センター)

[企画主旨]

これまで発達心理学では「意図共有」(Intention Sharing, Shared Intentionality)については、むしろ「共同注意」(joint attention)という用語を用いて、共同注意の能力がどのように発達し、生後1年過ぎごろからの言語シンボルの獲得がおこなわれるのか、という観点から議論されることが多かったと言える。生後9ヶ月頃以前は子どもが大人と対面して「いないいないばー」などの遊びを楽しむ、あるいは大人を介さず子どもがモノだけに集中して遊ぶという、「二項関係」の状態にあるとされる。しかし生後9ヶ月頃以降、子どもが大人の視線を確認し、モノへの視線と併用しつつ遊ぶ、いわゆる「子ども-大人-モノ」という「三項関係」に移行することになる。この流れは、自分と他者の注意の状況をモニターし、さらには指さしや発声などにより他者の注意の状態をコントロールする能力の発現によって可能となる。この「指示意図」の推測(環境にあるどの事物を指示しているのか)は、事物名称獲得などのための前段階の能力であると考えられるため、依然として重要であることは間違いない。しかし最近の研究では、乳幼児が幅広くさまざまな社会的信号に対して敏感であり、自ら発信も行うことが示され、援助行動(helping)出現との関係で他者のニーズに気づき向社会的行動を行う際の意図共有も注目されるようになってきている。さらには何らかの共通課題達成のために他者と協力する、という観点での意図共有も注目されつつあり、意図共有が人間社会における文化の進化をもたらす推進力となったことも主張されている(Tomasello, 2014, 2016)。

言語とコミュニケーションの能力は、人間を人間たらしめている基本的な能力であり、その発達の解明は発達心理学において最重要課題の一つである。これまで言語発達分科会ではこの能力の発達について、毎年の大会時にシンポジウムを開催し、音声知覚からナラティブや読み書きの発達に至るまで、様々の問題を取り上げてきた。今回は2017年度から開始された文部科学省新学術領域「共創的コミュニケーションのための進化言語学」プロジェクトの認知発達班との共催として本シンポジウムを企画した。話題提供者には、それぞれの分野で活躍されている皆川泰代氏、明地洋典氏、山本淳一氏にお願いし、意図共有とは何か、意図共有はいかに評価すべきか、意図共有により何がもたらされるかなどについて、ご自身の研究に加え、学界の動向も踏まえて議論いただく。皆川泰代氏には脳計測の観点から、明地洋典氏には心理学行実験の観点から、山本淳一氏には模倣行動と療育の観点からお話をいただき、幅広く発達について見識の高い大井学氏からコメントをいただく。さらにフロアからの議論も含め、意図共有について理解を深めることを目指す。

Tomasello, M. (2014) A natural history of human thinking. Cambridge, MA., Harvard University Press.

Tomasello, M. (2016) A natural history of human morality. Cambridge, MA., Harvard University Press.

「脳計測から探る意図共有：社会脳ネットワークの発達」 皆川泰代（慶應義塾大学）

乳幼児において他者の意図理解そして意図を共有する力は、コミュニケーションの発達において重要な第一歩である。このような他者の意図ないし心的状態を推定する能力（Mentalization）は、様々な脳部位から構成される社会脳ネットワークの中でも dmPFC (dorsomedial Prefrontal Cortex) が関与していることが成人の fMRI 研究からも考えられる。本発表では乳児の意図共有が成立するまでの発達過程において dmPFC がどのように機能し、他の社会脳ネットワークとどのように結びついてくるかについて、fNIRS (functional Near Infrared Spectroscopy) を用いた 3 つの脳機能研究（1. 6 ヶ月児の自己認識についての前頭反応、2. 4-5, 6-7 ヶ月児の随伴的社会信号、非社会的信号への脳反応、3. 共同注意時の脳活動）から考察することで意図共有の機能を探りたい。

Minagawa, Y., Xu, M., & Morimoto, S. (2018) Toward interactive social neuroscience: Neuroimaging the real-world interaction in various populations. *Japanese Psychological Research*, 60(4), 196-224.

「意図推論をめぐる4つの問い」 明地洋典（東京大学こころの多様性と適応の統合的研究機構）

意図共有は、発達心理学において重要な主題であるとともに、心理学のみならず、哲学、言語学、人類学、動物行動学など様々な分野においても重要な位置を占めている。それは、他種では見られないような複雑かつ円滑なやり方で意図を共有することが人間的な社会生活の基盤となっているからに他ならない。本発表では、特に意図の推論過程に焦点を当て、その生物学的基盤、個体発生、系統発生、適応的意義の4側面について考えることを通して、意図共有について考察したい。その中で、心の理論、語用論的コミュニケーション、自閉スペクトラムなどを取り上げ、自身の研究も含め (Akechi et al., 2018)、これまでの実験的研究の知見を確認し、意図共有に関してどのように実証的に検討されてきたか、また、今後、検討してゆくべきかということについても議論を深めることができれば、と考えている。

Akechi, H., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Hakarino, K., & Hasegawa, T. (2018). Mind perception and moral judgment in autism. *Autism Research*. doi:10.1002/aur.1970

「相互模倣の発達支援研究から意図共有を探る」 山本淳一（慶應義塾大学）

コミュニケーションは相互性が基本である。意図共有についても、送り手と受け手の双方の行動が、同時に並行して起こっている。自閉スペクトラム症児（以下、自閉症児）との意図共有が難しい場合も、その認知に原因帰属させるのではなく、次の2つのコンテキストを同時に分析する研究と実践が必要であろう。「自閉症児は、私たちの意図を理解（共有）できない。」「私たちは、自閉症児の意図を理解（共有）できない。」私たちは、発達支援研究を通じて「どのようにしたら、子どもたちと『意図共有』が可能になるか」を実証しようと試みてきた。その中で、大人が自閉症児の行動や言語を模倣すること（随伴模倣）によって、自閉症児の模倣行動や対人相互作用のターン数が増え、また相互模倣の繰り返しによって相手の顔への視線定位、動作や音声反応の正確さが向上することを示してきた (Ishizuka & Yamamoto, 2016)。意図共有の理論、基礎、臨床をどうつなぐか、具体的なデータを示しながら話題提供を行う。

Ishizuka, Y., & Yamamoto, J. (2016) Contingent imitation increases verbal interaction in children with autism spectrum disorders. *Autism*, 20, 1011-1020.